Kokugo

国語

第十二号

國語

第十二號

株式會社
明治書院

國語科學講座の完成に際して

上田萬年

國語科學講座が、豫定の如く全十二回の配本を了つて、こゝに完成を告げたことは、私の最も欣快とするところである。

私はさきに、この講座の發刊に際して、いさゝかわが國語學の過去を回顧し、將來に對する希望を述べて、その前途を祝福したのであつたが、その出版成績に就いては、多少の危惧を持たぬではなかつた。しかるに、この點に於ても拔群の好成績を收め得たといふことを聞いて、國語の研究に關心をもつものの意外に多數であることを知り、今後に於ける斯學興隆の兆として、悦に堪へない次第である。

私は目下微恙、身邊思ふに任せぬため、これら輝かしい國語の科學的研究の成果を、詳しく閲讀して、その所感を述べるの光榮を果し得ないが、さき頃、スキスのレマン湖畔に長逝せられたわが國語學の功勞者、バシル・ホール・チエンバレン先生に對しても、これらの研究成果をお目にかけ得たならば、感慨の一しほ深いものがあつたであらうと思ふのである。

近來、世界に於ける日本語研究熱は、とみに熾烈なるものがあつて、各國の大學に日本語學の講座が設けられつゝあるとのことである。これは誠によろこばしいことであつて、わが日本語を、今後益々科學的に精査討究して、この旺盛なる日本語研究の要求に應ずるとともに、又この機運を助長することは、今後に於ける國語學徒の新進が負はねばならぬ任務であると思ふのである。

私は本講座が、現在に於ける各方面の國語研究の最高水準を示して、今後の進展に資するところ大なるを信じ、この有意義なる講座の執筆を擔當せられた學者諸彥に甚大の感謝を捧げるとともに、その將來の活躍に對して深い希望を寄せる次第である。

一言所感を述べて、本講座の完成を祝する。

日本言語學の建設のために

新村出

吾々日本人として言語の學に從ふ者は、日本の言語學を建設するを以て任務とすべきである。日本の言語學を建設する爲には、それが比較的又は歷史的言語學であれ、理論的言語學であれ、日本語を硏究對象とする國語學をその基

礎とし、その出發點として進まなければならないのはいふまでもない。

西洋に於ても、かれら自國の國語學、ギリシヤはギリシヤの、ドイツはドイツの、フランスはフランスの國語學を經て、かれらの言語學を建てたのである。かれら同志の國民語・民族語を、東西に比較し、古今の變遷を辿つて、かれらの比較的又は歴史的言語學の輝かしい業績を殘したのである。

吾々日本人も、われらの國語を、同系異系の近接民族の言語又は同一文化圏内の諸言語と比較し對照し、その變化を追求しなどして、東方の比較言語學・史的言語學を創建し組織しなければならぬ。又東方に於ける諸々の異民族の觀念の異同を究め、その言語現象が共有であるか殊有であるかを識つて、そのうちから理論的言語學を生み出す試みをすることが必要である。

かくて、日本の言語學を建設する爲に、既に試みられた國語學の業績は申すに及ばず、先進西洋系統の言語學を、紹介し祖述し翻譯し咀嚼するは、當然踏まねばならぬ經路であるが、わが國語科學講座は、この任務を十分に果し、曾てなかつた業績を昭和日本に弘布したのである。私はこれを衷心から喜ぶと共に、若き日本の言語學徒に期待するところ大なるものがあるのである。

最後に私として一言しなければならないのは、自分がこの一二年間、とかく健康が衰へ根氣が乏しくなつた上に、身邊の事情の繁多が益〻加はり來つたため、か〻る重要な意義を有する國語科學講座に對して、十分意を盡しがたかつたこと、從つて半田信氏の折角の努力にも報いることも出來ず、讀者諸彥のいくらかの期待にも添ふことが叶はなかつたことを恐縮に感じてゐることとである。

國語科學のあけぼの

大西雅雄

「國語科學講座」全十二卷が玆に豫定通り完了したといふ事は、たゞ月並の讃辭を以つて終り得ないものがある。それは、この講座に盛られた內容及びこの事業に意圖せられた所が、在來の所謂「講座」や「全集」の如き單なる集大成とは、根本的に趣を異にしてゐる點である。

卽ち、この講座はその名稱が示す通り、國語に對する新しい科學的檢討であり、科學的建設であつた。實に、傳統的國語觀を打破つて、新しい合理的見地に立つた新言語觀であり、新國語觀であり、新國語教育觀であつた。

その內の或るものは、明治大正以來の問題に的確なる解決案を與へたものがあり、又或るものは昭和の國語觀として新しい行手を示せるものがあり、又或るものは國語界に前人未踏の分野を展開して居り、更に又或るものは國語教育界に最も有効な整理統制を指示してゐる。要するに、この講座は、今日までのわが國語界の最も高度の理智と情熱とを以つて築かれた、最も合理的な紀念塔であつたといへよう。この高塔から響きわたる警鐘こそ、眠れる「言靈」に「サイエンス」の活を注がんとする實に大いなる新國語運動の合圖である。

世人は一時かの獨佛間に横はるザール地方の問題に興味を惹かれた。しかし、靜かに思へ。これは政治問題でも、經濟問題でもなく、實に「ことたま」自身の問題であつたのである。ジェネーヴといふ科學機構は、ザールの民に「言靈」の覺醒を促して、已が本來の所屬を整理した。凡そ眠れる「言靈」には刺戟ほど大切なものはなく、その刺戟は來るべき新しい活動の源泉となる。

國語科學講座は、「言靈」へのよき刺戟の一針として、これを禮讃すること前述の通りであるが、併せ考へらるべきは、尙來るべきジェネーヴ關係、繰り返へさるべきローレンス問題である。國語の科學的認識は未だ決して行屆いたものと觀ることは出來ない。古き國語觀は依然として横行してゐるのである。文法觀にしろ、解釋觀にしろ、音韻論にしろ、漢字論にしろ、假名遣法にしろ、ローマ字綴法にしろ、又、標準語教育にしろ、基本語教育にしろ、發音教育にしろ、その根底に於て未だ傳統因習の力と新興科學の力とが、五對五の均齊にさへ進んでない事を直觀しなければならぬ。いはゆる「非常時」の如き時代に稱へられる「國語愛」なるものは、徒らに「言靈」の傳統觀のみが偏重せられて、その合理化が忘却せられ勝である。

「國語科學」の世界は、未だほんの曙の帷が切り落された計りである。この講座に盛られた所が更に研究大成されるのも、これが實際教育の滋味となるのも、實は之からである。今はその發刊が歡迎せられたのと同じ意味に於いて、その完了を歡び、併せてその浸潤普及を望むことに於いて切である。

もしそれ、浸潤普及を助け、又前述の如く國語合理化の困難なるを援ける見地からすれば、附け加へて希ふべき一事がある。それは講座の延長となるべき、種々の研究及び發表機關が出現すべき事である。抑々國語科學講座の如きは、單純なる出版事業ではなく、實は大いなる「國語合理化運動」の一部分である。これを機として、全國的な國語研究協會の結成せられるのも宜しく、その繼續的發表機關も必要である。

更に又、この文化事業に先鞭を打つた明治書院が、眞にその計畫を大成せんとならば、別に引續き「國語科學」の月刊でも出して諸學者の所説を繼續發表させると同時に、研究批判せしめなければならぬ。又別に「國語科學索引」、或は「國語科學辭典」の如き形式で、實用に供する纒めを提供せられる事も大切である。兎まれ、わが「國語科學」界は、今やその雄々しくも美はしき「曙」の光に歡ぶ。

國語科學講座の完成に際して

編輯者　半田信

國語科學講座の最初からの計畫者であり、最後までの編輯者であつた私は、いまこの講座の完成に際して、感慨無量、いふべからざるものあるを覺える。

上田萬年博士は、私を激勵して、この講座が生れたのは君の功績である。この功績を無にしてはならぬ。終生、この講座を守り育てるといふ覺悟を持たなければならぬ、と仰言つて下さいました。私は非常な感激を持つてそのお言葉を聽くとともに、全生命を打込んで、この事に當る覺悟をいたしました。軍人は戰場にある時、その全身全靈を捧げる。私もまた文化の戰場に於て、その事のなければならぬものと自ら任じ、丸二ケ年と有餘、自らの私生活を顧る暇なく、たつた一人で、この講座の完成のために、全身全靈を捧げ、魂を打込んで從事して來ました。その間、いふべからざる苦心を要したけれども漸く、こゝに完成し得て、私はいま大いなる喜びに浸つてゐる。

完成に當つて、上田萬年博士をはじめ、編輯顧問として、最後まで御指導下さつた、新村出先生、吉澤義則先生、橋本進吉先生、神保格先生に深い感謝を捧げます。また特別の御助言を惜しまれなかつた東條操先生をはじめ、執筆者の諸先生、殊にも、特別の友誼を寄せて常に足らざる私を激勵して下さつた諸先生に對して深い感謝を捧げます。又購讀者の皆樣が、最後まで厚い御支持と多くの激勵を寄せて下さつたことに對しても深い感謝を捧げます。最後に明治書院が、編輯者としての私が不敏であつた爲に、いくら日夜奔走しても、遂に意外に時日が延引したにも拘はらず、非常に寛大であられたことに對し深い感謝を捧げます。

上田萬年博士が仰言られた言葉、この講座を終生守り育てなければならぬ、といふお言葉、そのお言葉に從つて、私は終生、これを守り育てようと思ふ。その間よし堪へ得ざるほどの障害が起つて、私を奈落の底に突き落すことがあつても、私はその障害を踏み越えて進まう。さういふ覺悟を確乎として不拔に持つた。そのためには、種〻な計畫がなかつたのではない。ある、ある、山ほどある。しかし、講座の完成をめざして、寧日なかつたために、今、その

計畫を發表し得ないことを殘念に思ふ。しかし、よし餓死しても、その計畫を發表する日のために戰ふつもりだ。どうぞまた、その日を期して、今後とも、更に深い御支持を下さらんことを祈る。

言葉は文化の戰士である。日本語は日本文化の戰士である。われわれは、この日本文化の戰士のために、更に強く戰ふの覺悟を持たなければならぬ。

「國語科學講座」正誤

「九州の方言」補正追加

頁	行	誤	正
39	三	きのえ	きのふ
41	九	上編	上編・八編(文化六年)中卷(改刻本は九編卷之下)
42	五	ものがたり	ばなし
74	七	第四號	第五號

「國語」第十號正誤追加

頁	行	誤	正
4上	十五	日	西日

比較言語學

五二頁 六行 西暦前十五乃至十三世紀

六四頁 一行 (sons presse)ノ代リニ 1934

六五頁 最後ノ行 (Paris 1924, ノ次ニ) nouvelle édition 1934 ヲ入ル

七〇頁 七行 (P. Giles)ト八行(E. H. Srandgent)トノ間ニ C. D. Buck: Comparative grammar of Greek and Latin, Chicago 1933 ヲ入レル

國語法要說

頁	行	誤	正
目次	十三行	接と接辭	辭と接辭
一六	七	「雨傘でせう」	「雨傘でせう」
二〇	一	「山だのは」	削ル
二八	一〇	「添へる爲の」	「添へる爲の」
三三	三	「來る」	「來」
五〇	七	(一)(二)(三)	(一)(二)(四)
五六	三	名詞	(名詞)
		代名詞	(代名詞)
		數詞	(數詞)
五六		飾修接續	修飾接續
六一	三—四	「今度ばかりでもない」	「今度ばかりは行かない」
七二	四	接と接辭	辭と接辭

「近古の國語」訂正

頁	行	誤	正
目次	四	母韻	母音

頁	行	誤	正
四	八	中古語から近世語へ	古代語から近代語へ
五	一三	資科	資料
六	一〇	音韻史に	音韻史の闡明に
一一	二	明瞭なチルをもつて發音すべきものではない	全然鼻音化しないのでもなく、亦明瞭なチルをもつて發音すべきものでもない
一四	七―八	母音を伴つた音ではなく、	母音をもつて發音するのではなく、
二八	九	(表)	(俵)
三二	六	chiの發音に	チの發音にも
五一	一五	tŏca	tŏca
六二	七	(天草、本四)	(天草本、四)
七七	一四	にござる	にござる
七九	二	ないか	ないが
七九	六	ヲシヤツツ	ヲシヤツツ

「おしやる」の語源に關して、三ケ尻浩氏は「國語の精髓たる敬語法について」「敬語論補正」なる論文を國語教育第十九卷第八號・第九號に投じて、「仰せらる」「仰せある」との二語源が合流したものであるが主流は「仰せらる」にあるとの意見を發表された。

頁	行	誤	正
八六	三	連用形と見てよいやうである。	連用形と見てよいやうであるが、或は又

即ち、「仰せらる」は平安朝以來盛に用ゐられてゐるのに、「仰せある」は鎌倉時代以後現れてその用例も少い。又「仰せらる」から轉じた「おしらる」の用例が捷解新語等の中にあり、而も四段活用の外に下二段活用によつた所が多いのである。故に「おしやる」の主たる源流は「仰せらる」であつて、それが「おしらる」となつたのであるが、又別に鎌倉時代からは「動詞連用形＋ある」の言ひ方が勢力を得たので、それに類推した「仰せある」が現れ、更に四段活用の「おしやる」が出來上り、すべて此の語形によつて統一されたのであらう。「おしらる」が「おしやる」となつたのは音韻變化の自然な經路をふんだものであるか否かは容易に斷定し難いやうに思はれる。「仰せある」と「おしやる」との中間語形が見出し難いのは「御出である」「御入りある」が「おぢやる」「おりやる」と變化した結果への類推であるのにもよるであらう。

			一般に打消の助動詞が未然形に接續するのに類推したのではなからうか。
八七	九	ト。マ。、ヨ。	ト。マ。、ヨ。
八九	一一	(二六丁表)	(一六丁表)
九一	一三	却て	却つて
九四	一二	困難があるが、	困難がある。以下を削る。
九八	一	てけれ	てけれ
一〇七	一三―一四	然し室町末期には…兩様に書いてある。	上の部分を削る。天草本平家物語にも「たそ」とのみある。
一一二	二	歎がはしい	歎かはしい。

古代解釋學後篇補正

(頁・行)	(誤)	(正)
二六頁上二行	和年	和五。年
二八頁下四行	(下記ヲ加フ)	岡田米夫編「校訂眞淵宣長 古事記神代卷」(昭和八年版、一冊)
三二頁上七行	和年	和五。年
三三頁上十行	和年	大正十五。年

同　上十一行	宴(歌續	宴歌(續
三九頁下五行	(註。ノ下ニ下記ヲ加フ)	六冊。
四四頁下九行	(下記ヲ加フ)	「石上宅嗣卿」(昭和五年版、一冊)
同下高橋氏文ノ項末行	氏に	氏文。に
四五頁下十行	「法王帝説と十七條憲法」	「聖德太子憲法と法王帝説の研究」(會田範治、昭和五年版、一冊)
五五頁下十五行	(下記ヲ加フ)	作者別時代別新古今和歌集(窪田空穗、昭和八年版、一冊)
五八頁下八行	(下記ヲ加フ)	「本願寺三十六人家集の研究」(田中親美、書藝)
同　下終行	二卷〇伊	二卷。伊
七十頁上五行	本古	古本
八九頁下二十行	通俊	俊通
九一頁下十行	園(一冊)	園(一冊、外山英策)
一〇三頁下十四行	本類	本願。
一一四頁上三行	附丹	附。丹
同　上五行	あり。	あり。)
一一七頁上九行	撮讓	撮壤。
同　上終行	全版	全般。
一一九頁下七行	著途	著述。

〇印行を急ぎしため、誤脫と形式の前後整はざる點等出來せり。御寬恕を乞ふ。(川瀨)

「國語科學講座」完成項目

I 言語學

言語學概說……東京文理科大學教授 神保格
言語學史……東北帝國大學助教授 小林淳男
言語史講話……駒澤大學教授 石黑魯平
言語心理學……東京文理科大學教授 神保格
言語社會學……日本大學教授 田邊壽利
言語美學……帝國美術學校教授 金原省吾
比較言語學……東京帝國大學助教授 福島直四郎

II 音聲學

音聲學概說……九州帝國大學教授 文學博士 佐久間鼎
音聲學史……日本女高等學院教授 大西雅雄
音聲心理學……九州帝國大學教授 文學博士 佐久間鼎
音聲物理學……東京帝國大學教授 理學博士 小幡重一
音聲生理學……醫學博士 岡田和一郎
國語音聲學……東京文理科大學教授 神保格
應用音聲學……日本女高等學院教授 大西雅雄

III 國語學（一般と特殊）

國語學總說……東北帝國大學教授 安藤正次
國語學史……宮城女子專門校教授 重松信弘
國語學書目解題……大谷大學教授 龜田次郎
國語位相論……宮城女校專攻科教授 菊澤季生
語彙の研究……京都帝國大學講師 泉井久之助
漢文訓讀と國文法……文學博士 山田孝雄

IV 國語學（一般と特殊）

國語系統論……京都帝國大學教授 文學博士 新村出
漢語と國語……第五高等學校教授 文學博士 岡井愼吾
梵語と國語……東京帝國大學教授 文學博士 長井眞琴
朝鮮語と日本語……東京帝國大學教授 文學博士 小倉進平

V 國語史學

VI 國語法

VII 國語方言學

VIII 文字學

執筆者紹介

橋本　進吉　京都府立第一中學校・第三高等學校を經て、東京帝國大學文學科（言語學受驗科）卒業せられた。
東京帝國大學助手・助教授を經て、現在は教授で文學博士であられる。著書には、「古本節用集の研究」上田萬年先生と合著があり、「文祿元年天草版吉利支丹教義の研究」がある。

春日　政治　明治十一年四月一日長野縣上伊那郡美篶村に生る、同三十四年東京高等師範學校に入り國語漢文科を修め、同三十八年卒業、同四十一年京都帝國大學文學部に入り國語學を專攻し同四十四年卒業せられた。奈良女子高等師範學校教授を經、現に九州帝國大學法文學部教授であられる。正倉院其の他古社寺にある古訓點資料を研究せられてゐる。

重久篤太郎　昭和四年同志社大學英文學科を卒業せられ、現在、同志社高等商業學校講師、京都帝國大學圖書館囑託であられ、昭和七年より季刊「外來語研究」を編輯してゐられる。

重松　信弘　昭和二年東北帝國大學法文學部を卒へられ後研究室に殘り、昭和四年より宮城縣女子專門學校教授として現在に及んでゐられる。著書はないが雜誌發表の論文數種がある。東北帝大附屬圖書館で發刊の「源氏物語關係書解題」は氏の執筆である。

泉井久之助　京都帝國大學の言語學の講師であられ、最近メイエの「史的言語學に於ける比較の方法」の譯著を出された。

新村　出　京都帝國大學の言語學の教授で、文學博士であられ、南蠻文學その他多くの名著がある。のは知ることである。

吉澤　義則　京都帝國大學國語國文科の教授で、文學博士であられる。その假名に於ける名筆と共に、名著が多く、御紹介するまでもない。

岡田和一郎　東京帝國大學名譽教授醫學博士であり、現在、東京聾啞學校に於て音聲生理學を講じてゐられる。

山田　孝雄　前東北帝國大學教授文學博士であられ、その著「日本文法論」の外、名著多く、現在は、國語辭書の編纂に從事してゐられると聽く。

柳田　國男　わが國に於ける民俗學研究の權威、又方言研究者として名高く、その著「蝸牛考」は方言周圏論を論證せるものとして有名である。

江　實　京都帝國大學言語學科卒業、目下雜誌「方言」にエルンス・ガミルシェーク著「言語地理學とその一般言語學に對する寄與」を譯載してゐられる。

澤田　慶輔　東京帝國大學心理學科卒業、言語心理學を專攻し、それらに關する論文が數種ある。

三井　透　東京帝國大學心理學科卒業。横濱高等工業學校教授、法政大學講師であられ、岩波講座「教育科學」には、言語心理學を發表してゐられる。

城戸幡太郎　東京帝國大學卒業。現在は法政大學教授、東京帝國大學講師であられる。著書には「ナトルプ心理學概説」「文化と個性と教育」「心理學の問題」「古代日本人の世界觀」「心理學概說」「現代心理學の問題」等がある。

山岸 徳平 東京高師を經て、東京帝國大學國文科を卒へられ、學習院教授を經て、現在、東京文理科大學助教授であられる。

川瀬 一馬 東京文理科大學國語國文科を卒へられ、雜誌「書誌學」を編輯してゐられる。

田中 寛一 東京文理科大學教授文學博士であられ、著作は多く、「日本民族の將來」「教育測定學」等、特に名高い。

石山 脩平 濱松師範・東京高師を經て京都帝國大學を卒へられ、濱松師範教諭、東京高師助教授・東京文理科大學助手を經て、現在東京高師教授であられる。その著には、「純粹教育學原論」「辨證的教育學」「西洋教育史」等がある。

學界消息

故王堂チエンバレン教授追悼講演會及展覽會 わが國語學の功勞者であるバシル・ホール・チエンバレン教授がスイスのレマン湖畔に長逝せられたので、國際文化振興會主催でその追悼講演會と展覽會が三月九日明治生命館講堂で開催され盛會であつた。

藤岡勝二博士長逝 東京帝大名譽教授文學博士藤岡勝二氏は二月二十八日遂に長逝せられた。告別式は三月四日淺草東本願寺で行はれた。博士は人も知る如くわが言語學界の世界的權威で、その門下には多數の俊秀が輩出し、現在のわが言語學界國語學界に多くの功績を顯はしてゐる。藤岡博士は著述がないとされてゐるが、滿洲語の「三朝實錄の過半と蒙古語の大辭書が、ほゞ完成されてゐるとのことである。

金田一京助教授が博士に 石川啄木の友人として、若き人達にも親しみを持たれてゐる金田一京助教授は、アイヌ語學の權威として唯一の人であるが、今度その「アイヌ敍事詩ユーカラの研究」が東大の教授會を通過し、文學博士の學位を授けられることになつたと聽く。

編輯後記

△國語科學講座の最後の配本をいたします。遲れましたが、大變部厚なものになり、相當骨が折れました。御諒恕下さい。

△新村出先生は身邊非常に御多忙であられました爲に、三項目のうち、國語系統論のみを御執筆下され、他の一は、最近メイエの「史的言語學に於ける比較の方法」を譯出せられた泉井久之助先生に、他の一は、市河三喜先生にも遂に御執筆いたゞけなかつたので、明治以前、明治以後を合せて、外來語研究の編輯をせられてゐる重久篤太郎先生に、代つて御執筆いたゞきました。

△垣内松三先生は、最初から最後まで講座の爲に非常に御盡力下さいましたが、中途から身邊の事情に御變化があり、益々御繁多を加へられたために、遂に御執筆をいたゞくわけにいかず、二項目とも同じく東京高師教授石山脩平先生に、御無理に御依賴いたし、御多忙のところ御執筆いたゞきました。

△國語形態論の松本金壽先生は、非常な意氣込で準備を進めてゐて下さいましたが、昨年來非常に健康を害せられたために、遂にほんのわづかにしか御執筆願はれませんでした。

△佐々木秀一先生の各國國語讀本の比較と、城戸幡太郎先生の外來語と國民文化の二項目は、最初執筆を御快諾下さつてゐたのですが

あまりに身邊が多忙であるため執筆不可能といふことになり、二項目とも他に適當な執筆者を求めたのですが、何せ特殊な項目ではあり、短時日のうちに代つて御執筆をいたゞくわけに行かず、第二の手段として、題目を變更して書いていたゞく方法を取つたのですが、それも能はず、止むを得ず、他日何かの機會に於て、これを補ふ覺悟を以て、二項目を割愛いたしました。

△以上、書き記しましたことは、講座の進行中に起つた變化に對する編輯者としての處置を申上げたのですが、私といたしましては、最後まで誠意を以て事に當つて、成し能はなかつたことで御座いますので、いさゞよく事情を申述べて、讀者諸君の御寛恕を乞ふ次第であります。

△なほ、言語學なら言語學を合せて製本するために、扉、目次などをお添へいたし度いと思ひましたが、三月三十一日の最後のギリギリの發行日までに、漸くにして間に合ふといふ事情でありましたため、それを爲し得ませんでした。更に、讀者諸君のうちに、合せて製本いたし度いから、方法を明示して呉れと申された向もあるので御座いますが、製本上の明細をこゝに發表いたしかねますが、製本御希望の方は、明治書院にお申込下さいますれば、明細に御返答申上げて、實費を以てお申込に應ずることになつてゐます。この點もお含み願ひます。

△第二回募集をせよといふ希望が、最近非常に殖えて來ました。神田の古本屋に、この講座だけは姿を見せないのです。この樣子から考へても、愛好の藏書として他に出さない事と本講座が、市場に汎濫しなかつたことを物語つてゐます。かなりの需用があるものと想像されるけれども、現在、第二回募集をするかどうか、まだ決定いたしてをりません。しかし、殘本は多少御座いますから、御要求には應じられると思ひます。

△講座の延長として、國語の雜誌を出せといふ要求が、非常に強く、その要求に應ずることは國語科學講座の精神として、誠にふさはしいのですが、そして、執筆者の諸先生も非常な熱心を以て、その實現を企圖してゐられるのですが、終刊に際して、その實現を讀者諸君に告げるまでには立至つてをりません。これは非常に殘念なので御座いますが、何時かの日には、必ず實現いたし度いと念願し、そのために努力を惜しまないつもりで御座います。どうぞその節には、再び相見えて、言葉のためにお互に研究批判いたし度いものと存じます。

△本土は勿論のこと、遠くハワイ、米國、滿洲、朝鮮、臺灣、樺太と、わが國語科學講座は、ひろくゆき亘つてゐます。これらの國語愛の強い皆樣と、手を携へて、文化の戰士、言葉のために、戰ふの日をいのり乍ら、私は深い感慨を以て、最後の編輯後記の筆を擱きます。(半田)

國語第十二號

昭和十年四月二十五日 印刷
昭和十年四月三十一日 發行

東京市神田區錦町一丁目十六番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者 細谷祐三

發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社 明治書院